



J-MILK REPORT

vol-26

2017.AUTUMN

特集 アンチミルク情報の影響と対策

- 02 乳の学術連合の窓
骨の健康とカルシウムの関係
～医療現場に伝えたい最新研究の成果～
廣田 孝子 氏 京都光華女子大学 健康科学部 健康栄養学科 教授
- 06 酪農乳業産業基盤強化特別対策事業の経過報告
- 08 平成 29 年度の生乳及び牛乳乳製品の
需給見通しと当面の課題
- 10 動画でわかりやすく学べる「牛の扱い方マニュアル」
米国 FARM (Farm Assuring Responsible Management) プログラム
- 10 IFCN Dairy Conference 2017 最新レポート
竹下広宣氏 名古屋大学大学院 生命農学研究科 准教授
- 11 3 組織の交流と相互連携を目的に合同開催
平成 29 年度「乳の学術連合」研究報告会
- 12 牛乳・ヨーグルトには高血圧や糖尿病の予防効果
岡山 明 氏 生活習慣病予防研究センター代表
/ 第 47 回メディアミルクセミナー
- 12 乳脂肪にまつわる最近の話題
その 2 ～飽和脂肪酸(続き)～
- 13 業界が思いをひとつに。酪農の特性を活かしては？
菊池 一郎 氏 関東生乳販売農業協同組合連合会 代表理事会長、
酪農とちぎ農業協同組合代表理事理事長
- 14 社員食堂から“乳業メーカーらしさ”を発信
森永乳業社食で 6 月から乳和食提供
- 14 おいしく減塩！乳和食レシピ
ミルクのコクを煮物に活かす「筑前煮」
- 15 厚生労働省の「食生活改善普及運動」に
牛乳の摂取が追加
「毎日の暮らしに with ミルク」啓発ツールについて
- 15 今後のイベント開催の情報

骨の健康とカルシウムの関係 ～医療現場に伝えたい最新研究の成果～

廣田 孝子 氏 京都光華女子大学 健康科学部 健康栄養学科 教授

乳の学術連合・牛乳乳製品健康科学会議では、乳の栄養健康機能における価値をテーマに新たな知見の研究やエビデンスの収集を行っている。乳の栄養機能の柱となるカルシウムと、骨粗しょう症予防など骨の健康との関連について、同会議会員の廣田孝子氏に聞いた。

思春期の骨密度増加が将来の骨の健康に

— 先生は以前から、子どもたちの骨密度に着目した研究を続けられてきました。骨粗しょう症予防の点でも子どもの骨の健康は重要です。

廣田氏：海外での最近の研究によると、思春期の骨密度を10%高くすることで、高齢期の骨粗しょう症の発症を10年以上も遅らせることが出来ると報告されています。特に女性は、10歳代半ばに骨密度のピークを迎えるので、この時期までに出来るだけ高めておくことが重要です。

本学園の小学高学年と中学生の骨密度を測定し、以前(2000年頃)測定した子供達のデータと比較したところ、まず、現代っ子は、日焼けを気にして、日光浴をしながらない傾向が強く、ビタミンDが豊富な魚嫌いが多く、太るのも気にしていて、白くほっそりした小学生女子が多いです。次に、学校給食が毎日無く、牛乳を残す子供も多く、カルシウムとその吸収を促進するビタミンDの栄養状態は良好とは言えません。

そこで、今回の測定結果を子供達自身に知らせて、カルシウムやビタミンD、運動を増やせば、今ならタイミング良く骨密度を増やせる！といったアドバイスを家族も巻き込んで行いました。半年後に再度、測定を行ったところ、驚くほどに骨密度が増えていたのです。骨密度が最高に蓄積されるこの時期に、自身の骨密度値を知り、食生活などを改善すれば、効率良く骨密度を高められるのです。一生の骨の健康につながる実践的な取り組みを促すことが大切です。

牛乳にまつわる“誤解”の解消のために

— 骨粗しょう症予防における牛乳乳製品の価値は、一般の認知も高まっているように感じますが、先生はどう見られていますか。

廣田氏：牛乳摂取と骨粗しょう症予防の関連性についての認知は高まっていますが、その一方で「牛乳を毎日飲んでいたら太る」「動脈硬化になりやすいのでは」といった声も聞かれるようになってきました。

そこで学生を対象に、骨密度と動脈硬化指数(血管年齢)をあわせて計測してみたところ、両者に共通する相関因子は牛乳摂取で、子どもの頃に乳製品をよく摂っていた学生は骨密度が高く、血管年齢も若いことがわかりました。次に女子学生を対象に、適切な食事と運動によるダイエットに並行して毎日牛乳を飲んでもらったところ、牛乳を飲まないダイエットに比べて、体脂肪が大きく減って筋肉量は増えていました。牛乳を飲まないダイエットでは、減った体重の大部分は、筋肉でした。

以上の研究結果から、牛乳を飲むと太るのではなく、メタボリックシンドロームや動脈硬化につながるものでもないことがわかりました。むしろ牛乳やカルシウムは、骨や血管に良い影響を与えていると言えます。その際に重要なのは摂取するタイミングで、子どもの頃からの牛乳摂取が骨や血管づくりにはとても大切なのです。

残念ながら、牛乳の摂取が動脈硬化に影響するという意見は一部の医療現場でも聞かれます。こうした情報を伝えられた一般の人たちが、牛乳に対して誤解を抱いたり、飲まなくなったりするケースもあるようです。今後は医師や薬剤師、栄養士に向けて、科学的データを地道にお知らせしていく必要があると思います。

研究成果と生産者の思いをリンクさせる

— 乳の学術連合での今後の活動について、先生ご自身のお考えをお聞かせください。

廣田氏：学術連合の会員になってセミナーなどでの講演が多くなり、参加者の反応から自分の研究を顧みる機会が増えました。私は牛乳・乳製品をカルシウムという栄養面から捉えていたのですが、あるセミナーで酪農家のお話を聞いて、乳牛への思いや生産流通の現状について知ることができました。酪農家が苦勞してつくっているミルクを飲むと、体にもこんなにすばらしいことがあるというように、生産者の視点と私たちの研究成果をリンクさせることで、消費者も納得しやすい情報発信ができるのではないかと思います。

今後はこうした点も踏まえながら、各所での講演でカルシウム(牛乳・乳製品)の摂取や骨の話題を扱っていきたくと思っています。秋には医師会の先生方を対象に講演させていただく予定もあるので、医療現場へ向けた啓発活動を私なりにお手伝いできればいいなと考えています。



廣田 孝子 氏 京都光華女子大学 健康科学部 健康栄養学科 教授

神戸女学院大卒、大阪市立大学大学院生活科学部修士課程、大阪大学大学院医学部博士課程修了。米国ボストン大学医学部、米国国立衛生研究所勤務を経て、大阪大学医学研究員、辻学園中央研究室室長、その後現職。研究テーマは、抗加齢と疾病の予防のための食事と運動。



牛乳乳製品健康科学会議
乳の学術連合



Jミルク HP

繰り返される牛乳有害説の影響と対策について考える

ネット上では最近でも「牛乳有害説」にまつわる話が後を絶たない

アンチ情報がSNSで拡散する現状

現在、Googleなどで「牛乳」を検索すると、アンチミルクの情報が少なからず上位に掲載される。この発端の1つは、平成17年に出版されミリオンセラーとなった「病気になる生き方」（新谷弘実氏著・サンマーク出版）とされている。

これ以降、同様の書籍が複数出版され、ブログやTwitter、FacebookなどのSNSを介してアンチミルク情報の拡散が続いている。

また、テレビ番組で母親タレントが、「子どもには牛乳を飲ませない」と発言したことがインターネット上などで話題になった。その理由として「牛乳を飲むことで体内のカルシウムが尿と一緒に排出される」、「乳製品を多く摂っている国は骨粗しょう症にかかりやすい人が多い」と発言。これに対し、同じ番組に出演していた専門家がすぐに否定したが、その影響が懸念された。

と発言。これに対し、同じ番組に出演していた専門家がすぐに否定したが、その影響が懸念された。

正しい情報を知ってもらうために

Jミルクでは、平成17年3月28日著者に対して、公開質問状を発出し、回答を得たが、主張に対する科学的論拠が示されないばかりか、誤った統計の用い方もみられた。

さらにインターネットの普及により、人は手間をかけずにあらゆる情報に触れ、同時に個人の考え方を広く発信できるようになった。このような中、Jミルクでは消費者に牛乳乳製品の価値を正しく判断してもらうために、Webサイトを活用して、エビデンスに基づく情報提供を行っている。



JミルクHP



ウェブ検索で確認できるアンチミルク情報

牛乳は超危険！子供は絶対NG！がん・糖尿病・脳梗塞・心筋梗塞の恐れ

「超危険な牛乳を飲むことによって、さまざまな病気を引き起こすリスクが高まる」といふことだ。牛乳といふは、「カルシウムが豊富で骨を強くする」というイメージが強い。飲ませさやかれる「飲み過ぎで骨粗鬆症になる」という説の真偽については、どうなのだろうか。

「確かに、牛乳には1リットル中1200ミリグラムのカルシウムが入っていますが、それが必要とする人の体に吸収されて役に立っているかどうか。疑問です。カルシウムが体内で代謝されるためにはマグネシウムというミネラルが必要ですが、牛乳にはマグネシウムがほとんど含まれていないからです。

つまり、牛乳はカルシウムとマグネシウムの含有比率が悪いので、大量に摂取すると体内のミネラルバランスを大きく崩す可能性が考えられます。そんな牛乳が、なぜ完全栄養食品といわれるのか、疑問は湧きます。

もうひとつ問題なのは、牛乳にはリンというミネラルが多く含まれていることです。そのリンが骨の中でカルシウムと結合してしまい、カルシウムの吸収を阻害します。

さらに、牛乳には動物性たんぱく質も多く含まれていますが、たんぱく質は酸化腐敗で分解されてアミノ酸になります。体内でのアミノ酸の量が過剰になると血液が酸性に傾き、これを中和するために、骨は骨中のカルシウムを溶かして血液中に取り込む作業をします。これは「酸欠（だっかい）」といわれ、骨粗鬆症の初期段階です。（図1）

■ 吸入する女性ホルモンが、がんを引き起こす可能性も

牛乳は超危険！子供は絶対NG！がん・糖尿病・脳梗塞・心筋梗塞の恐れ。

「Business Journal」
2016/1/25 掲載記事

日本人の85%は「乳糖不耐症」！27年間治らなかった副鼻腔炎が、牛乳を辞めたことによって一瞬で完治した話。

27年間治らなかった副鼻腔炎が牛乳を辞めて噛み砕いた！

副鼻腔炎が治らなかった原因は何か？乳糖不耐症です。

乳糖不耐症とは乳糖が分解できず胃腸に吸収されず、腸管に到達してしまいます。腸管に到達した乳糖は腸管で水分を吸収し、腸管を刺激して下痢や腹痛の原因となります。

乳糖不耐症の原因は乳糖の分解酵素が不足することによって起こります。乳糖の分解には「乳糖酵素」と呼ばれる酵素が必要ですが、日本人の85%は乳糖不耐症です。

乳糖不耐症は乳糖の摂取量を減らすことで症状が軽減されます。乳糖不耐症の人は乳糖の摂取量を減らすことで、副鼻腔炎の症状が軽減されることがあります。

乳糖不耐症の診断方法は乳糖耐性試験です。乳糖耐性試験とは、乳糖を摂取した後に血糖値が上昇するかどうかを測定する方法です。

乳糖不耐症であると診断されたら、乳糖の摂取量を減らすことで症状が軽減されます。乳糖不耐症の人は乳糖の摂取量を減らすことで、副鼻腔炎の症状が軽減されることがあります。

日本人の85%は「乳糖不耐症」！27年間治らなかった副鼻腔炎が、牛乳を辞めたことによって一瞬で完治した話。

「IN YOU」
2016/6/13 掲載記事

それでも、牛乳を選びますか？

なぜ日本の学校給食ではいまだ「牛乳強制文化」が続くのか？

食育を目指す小中学校で、まだ牛乳は完全給食に欠かせない存在

牛乳って、本当に体にいいの？

牛乳は「健康にいい！」
「牛乳を飲まないと体が弱くなる」といふように、一般常識として牛乳を飲まなければならないと教えられてきた。

でも、牛乳は本当に体にいいのでしょうか？

牛乳は「健康にいい！」

それでもあなたは「牛乳」を選びますか？なぜ日本の学校給食ではいまだ「牛乳強制文化」が続くのか。

「IN YOU」
2016/10/22 掲載記事

アンチミルクに対する研究者の見解やエビデンス等を収集・整理

業界団体・酪農乳業関係者が連携して、正確な情報提供を続けることが重要

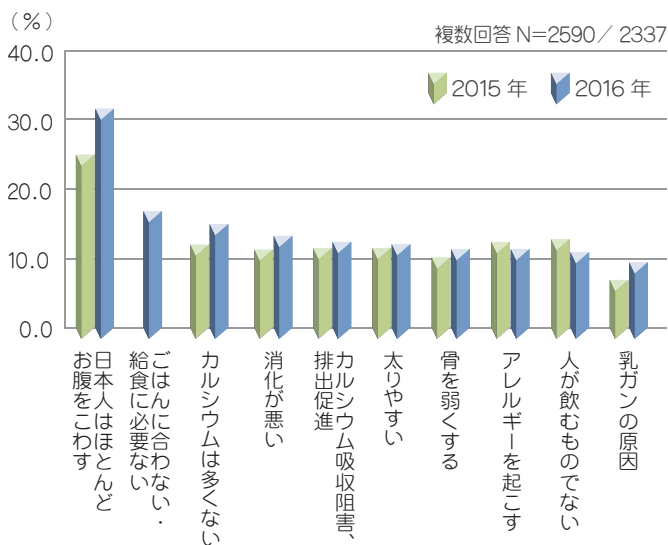
アンチミルク情報を見聞きしている人は増加

Ｊミルクの調査では、「日本人のほとんどがお腹をこわす」や「カルシウムは多くない」、「消化が悪い」などの話題を見聞きした人は前年より増えており、今後も、牛乳有害論などのいわゆるアンチミルクを訴える人々が、SNSを介して独自の言説を繰り返すことが想定される。

Ｊミルクでは、アンチミルクに対して「牛乳の気になるウワサをスッキリ解決！」サイトを展開し、消費者に向けて正確な情報提供を続けてきた。

今後もアンチミルクの主張に対して、適切な対応、必要な反論に向けて乳の学術連合の協力を得ながら、エビデンスの収集・整理を行っていく。

この1年間に見聞きした「よくない話題」



資料「牛乳乳製品に関する食生活動向調査 2016」



Web Site アンチミルク情報に対して、エビデンスに基づきわかりやすく解説している

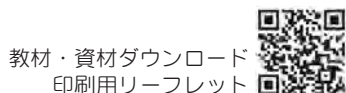
Leaf let リーフレットでわかりやすく

Ｊミルクのホームページで「教材・資料ダウンロード→印刷用リーフレット」をクリックすると、消費者に向けたリーフレットを閲覧・ダウンロードできます。

これらのリーフレットは、「牛乳の気になるウワサをスッキリ解決！」の内容をわかりやすく表現したものもあり、啓発ツールとしてご活用いただけます。



「お腹ゴロゴロはなぜ？牛乳と上手なつきあい方」
ウワサ16の「日本人のほとんどは、牛乳を飲むとおなかをこわす」には、乳糖不耐症のメカニズムを分かりやすく解説したリーフレットがおすすめ。



24のウワサをエビデンスで斬る！（更新中）



ウワサ16 「日本人のほとんどは、牛乳を飲むとおなかをこわす」

24 あるウワサの中で一番アクセスされている。乳糖不耐症の解説や、おなかゴロゴロの人におすすめの飲み方などを紹介。

「牛乳の気になるウワサ」閲覧数 29年度上半期 TOP 5

順位	ウワサ	タイトル	レビュー数
1	ウワサ 16	日本人のほとんどは、牛乳を飲むとおなかをこわす	18,412
2	ウワサ 24	牛乳・乳製品が心筋梗塞を招く	8,117
3	ウワサ 8	牛乳は胃の中で固まるので消化が悪い	3,272
4	ウワサ 22	市販の牛乳には「女性ホルモン作用」がある	2,553
5	ウワサ 14	牛乳は乳がんの原因になる	1,999

牛乳の気になるウワサを スッキリ解決！



「毎日の牛乳で高血圧を改善しよう！」

ウワサ24の「牛乳・乳製品が心筋梗塞を招く」には、牛乳の血圧&血糖改善効果のリーフレットを。

乳牛の生乳100%である牛乳の風味特性とは。

～牛乳は生きている～

小中学校で給食の牛乳を飲んだ児童・生徒が「牛乳の味がいつもと違う」などの訴えに対して、学校教育現場で適切な対応をしていただくため、「生乳100%」である牛乳の風味特性を理解してもらうことを目的として、2014年に冊子版「牛乳は生きている」を作成しました。

「牛乳は生きている」では、気温や湿度、乳牛の餌など飼育環境の変化で牛乳の風味が変わりうることや、牛乳工場での殺菌などの処理や管理・検査についても触れ、安全・安心面での乳業の取り組みについても学校に理解いただけるよう解説しながら、児童生徒への食育活動でも学校等で活用できる内容でまとめています。

また、牛乳を飲む人の健康状態、飲む環境、子どもの味覚的特徴などについても詳しく解説しています。

冊子のほか、リーフレット版「牛乳は生きている」は、A4両面1枚で牛乳の風味変化の特性を理解できるよう、ポイント解説したものです。是非、こうしたツールを学校とのコミュニケーションにご活用ください。

冊子



牛乳は生きている (冊子)



リーフレット



牛乳は生きている (リーフレット)



酪農乳業産業基盤強化特別対策事業（H29～31年度）の経過報告

毎号連載で経過報告

1. 各事業の進捗状況と今後の課題

(1) 乳用牛資源緊急確保事業(乳用牛の輸入)

本事業の事業実施主体として、全農、全酪連、熊本県酪連の3団体から事業申請があり、全酪連及び全農が実施した第1期の輸入については、当初計画に比べ減少した頭数の輸入・供給(全農：育成牛217頭、全酪連：169頭)となったものの、各段階における適切な対応により、防疫上問題のあった輸入牛が除外され、安全な生体のみが国内に供給されている。

乳用牛の輸入については、以下の課題が挙げられる。
 ①豪州内で防疫リスクが低いとされる西豪州地域は酪農家が少ないことに加え、今後、日本からの需要が集中することも予想される中で、輸入牛の価格が上昇し、国産乳用牛に対する価格優位性が相対的に低下する可能性。
 ②防疫上の問題が現地で発生した場合は、輸送機に搭載する頭数が減少し輸入コストが増嵩。また輸入後に発生した場合は、殺処分や防疫対策費などの掛かり増しの経費が増嵩することにより総事業費が膨張する可能性。
 ③日本での輸入検疫時にヨーネ病陽性牛が発生した場合、陽性牛と同一生産農場に由来する牛についても、ヨーネ病陰性にもかかわらず自主淘汰が求められる中で、動物福祉の観点から、日本への輸出を忌避する状況が豪牛側に出始めている模様。
 ④酪農家においては、防疫上のリスクの

他、輸入牛の能力や気質に関する不安もあり、「様子見」の傾向。第2期の輸入牛の需要は不透明。

これらの課題について、実行可能な改善と事業推進を図る必要。同時に、輸入コストの一層の低減と安全性の両立が図られるよう工夫が求められる。

また、輸入牛の特性(気質、月齢など)から、供給先酪農家が制限されてしまう一方で、大規模酪農経営の導入意欲にも配慮する観点から、実施要領に定める10頭/戸の要件について、上限を緩和するなどの措置も検討する必要がある。

本事業は関係者の注目度も高いことから、一定の段階で、これまでの輸入状況や課題について正確な情報を提供していく必要もある。

(2) 地域生産基盤強化支援事業

5月19日の事業実施要領通知以降、各指定団体においては、適宜、会議や説明会を開催し、Jミルクも必要に応じて出席した。8月末までに事業実施主体となる指定団体及び指定団体会員からの計画申請を受け、9月13日に事業審査会を開催し、特に「提案型生産基盤強化対策」について採択の可否を審査し決定した。

「提案型生産基盤強化対策」は、各地域の課題解決に向け、事業実施主体が自由度を持って実施できる『提案型』で推進し、15団体から申請を受け、9団体を採択した。

事業実施計画における申請内容

9月末時点の実績含む

		全農	全酪連	熊本県酪連
輸入時期 (予定)	第1期	H29年7月24日着 H29年8月9日解放	H29年6月13日着 H29年6月29日解放	H29年9月19日着 H29年10月5日解放
	第2期	H29年12月	H30年2月	H29年11月
輸入牛種類		両期とも育成牛	両期とも初妊牛	第1期：育成牛 第2期：初妊牛 (判別精液受胎)
輸入頭数 (計画)		第1期：217頭(実績) 第2期：330頭 合計：547頭	第1期：167頭(実績) 第2期：210頭 合計：377頭	第1期：120頭 第2期：200頭 合計：320頭
全体で、初妊牛577頭、育成牛667頭、総計1,244頭				

内 容	実施 団体数	事業費 (千円)	助成金 (千円)	対象 頭数
会議開催	8	1,583	1,583	—
研修会開催	4	2,332	2,180	—
提案型 生産基盤 強化対策	9 (申請15団体)	87,713	31,194	—
乳用牛 育成基盤 強化対策	22	40,717	40,717	26,077頭
更新経産牛 有効活用 対策	15	16,834	16,834	909頭
合 計	42団体	149,179	92,508	—

提案型生産基盤強化対策では以下の課題が挙げられる。①国等の補助事業が細部に亘り措置されている中、新規の事業構築が困難。②事業費の2分の1以上を事業実施主体の自主財源と組み合わせることで取り組むこととしたため、農協等で財源を措置できない場合は事業実施が困難。③一律の助成上限設定(500万円)では、酪農家が多い農協においては十分に事業を活用できない場合がある。

なお、生産者団体からは、採択された他地域の取り組みの共有化を求める声もあり、次年度以降、29年度の取り組み実績を整理し、効果的な取り組みについてメニュー化して全国で取り組むといった工夫が必要。また、異味異臭問題によって少なくない量の廃棄乳が発生している中、それらの問題へ対処する一環として、異味異臭に関連する検査に対しての助成を求める声もある。

「乳用牛育成基盤強化対策」については、地域の育成牛生産基盤を強化する取り組みへのニーズは高く、22団体から46施設のべ2.6万頭分の申請があり、申請施設における受入頭数は25%程度増加する計画。地域によっては、育成施設(自家育成施設、預託牧場など)が不十分なため、計画的に乳用種付けができないケースもある模様。

育成牛生産基盤が後継牛確保の制限要因とならないよう本事業を拡充することも考えられる。

「更新経産牛有効活用事業」については、乳牛売買が市場取引中心である地域は本対策に取り組み易いが、そうでない地域の申請は少ない傾向にあり、要件設定や助成額についても再検討を求める声もある。

以上を踏まえ、30年度以降の事業の推進については、12月中に事業内容を生産者団体に告知できるよう、早期に改善のための検討を開始する必要がある。

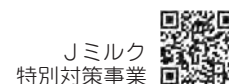
(3) 国産牛乳乳製品高付加価値化事業

乳業連合が事業実施主体の高付加価値化事業について、8月10日から全国14社の中小乳業及び乳業団体等による推進会議が開始された。各社の課題を共有し、アクションプラン策定に向けた検討が進められている。

都道府県段階におけるHACCP制度化、風味問題などのための研修会参加助成や研修会開催などについては事業活用への希望もあるが、地域段階の事業を取りまとめる体制が全国団体にないことから、Jミルクと都道府県牛乳協会が直接事業のやり取りをできる仕組みに要領を改正。

2. 酪農乳業産業基盤強化対策金の納入状況について

対策金同意乳業者は協力依頼した393乳業者中116社が同意。特別対策金申告乳業者は38社からの申告があり総額は5.5億円。これまでの水準で対策金の拠出が続けば年間3.2億円弱の収入が見込まれ、特別対策金(年間約1.8億円)と合わせると年間5億円の水準になる見込み。特別対策金については、申告のあった5.5億円のうち5.3億円がすでに入金済。



平成29年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題

公表：平成29年9月29日

平成29年度第3回需給委員会(9月19日開催)での協議を経て、9月29日に「平成29年度の生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題」を公表した。同日、農林水産省は「29年9月のバター及び脱脂粉乳等の輸入判断」において、29年度のバター輸入枠13.0千トン、脱脂粉乳輸入枠34.0千トンの変更ないことを公表した。

生乳生産量の見通し

29年度の生乳生産量は、北海道ではほぼ前年並み(3,877千トン・前年比99.5%)であるものの、都府県では前年度を下回り(3,368千トン・同97.6%)、その結果、全国の生乳生産量は前年度を下回る(7,245千トン・同98.6%)見通しである。

用途別処理量の見通し

29年度の用途別処理量は、「生乳供給量」が前年度を下回る(7,195千トン・前年比98.6%)見込みのなか、「飲用等向処理量」は前年を上回る(4,068千トン・同100.3%)と見通され、その結果、「乳製品向処理量」は前年を下回る(3,127千トン・同96.6%)見通しである。

牛乳等生産量の見通し

29年度の牛乳等生産量は、「牛乳類」は前年をやや下回る(4,690千kl・前年比99.2%)の見通し。「はっ酵乳」は、大きな伸びは一巡するものの、引き続き堅調な需要が見込まれ、通期では前年をやや下回る(1,089千kl・同99.7%)見通しである。

脱脂粉乳・バター需給の見通し

脱脂粉乳については、29年度の実生産量は前年度を下回る(117.7千トン、前年比95.3%)見通し。輸入売渡しとして、今後、29年度輸入予定数量34.0千トンが売り渡される予定となっており、29年度末在庫量は62.1千トン(前年度末比+13.9千トン)と増加する見込みである。

バターについては、29年度の実生産量は前年度を下回る(59.2千トン、同93.1%)見通し。輸入売渡しとして、今後、28年度追加輸入残量及び29年度輸入予定数量の計18.0千トンが売り渡される予定となっており、29年度末在庫量は28.6千トン(前年度末比+4.1千トン)と増加する見込みである。

	生乳生産量(見通し)						用途別処理量(見通し)						(千トン,%)
	全国		北海道		都府県		生乳供給量		飲用等向		乳製品向		
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比		
第1四半期	1,876	98.2	988	98.0	888	98.5	1,864	98.3	1,042	100.5	822	95.6	
第2四半期	1,787	97.8	975	98.8	812	96.7	1,774	97.8	1,049	101.0	725	93.5	
第3四半期	1,772	99.0	951	100.4	820	97.4	1,759	99.0	1,018	101.1	741	96.3	
第4四半期	1,810	99.5	963	101.1	847	97.8	1,798	99.5	960	98.5	838	100.7	
上期	3,663	98.0	1,963	98.4	1,700	97.6	3,638	98.0	2,091	100.7	1,548	94.6	
下期	3,582	99.3	1,914	100.8	1,668	97.6	3,557	99.3	1,978	99.8	1,579	98.6	
年度計	7,245	98.6	3,877	99.5	3,368	97.6	7,195	98.6	4,068	100.3	3,127	96.6	

	牛乳等生産量(見通し)										(千kl,%)		
	牛乳類		牛乳		加工乳		成分調整牛乳		乳飲料				はっ酵乳
	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比	前年比				
第1四半期	1,201	99.5	783	100.7	24	96.2	88	103.2	307	96.0	281	96.6	
第2四半期	1,234	99.8	782	101.0	23	96.4	93	101.9	336	96.8	273	100.0	
第3四半期	1,169	99.7	774	100.2	26	95.5	83	101.4	286	98.1	265	100.1	
第4四半期	1,087	97.8	724	98.5	24	91.2	80	97.3	258	96.5	269	102.5	
上期	2,435	99.6	1,565	100.8	47	96.3	181	102.5	643	96.4	554	98.2	
下期	2,255	98.7	1,497	99.4	50	93.3	164	99.3	544	97.3	534	101.3	
年度計	4,690	99.2	3,062	100.1	97	94.7	344	101.0	1,187	96.8	1,089	99.7	

需給動向を踏まえた当面の課題と対応について

1. 当面の生乳生産量維持への取り組み

29年度の生乳生産量について、前回公表した見通し(7月25日公表、気温が高い場合の予測値)に対して、北海道では7月は猛暑の影響で落ち込んだが、8月は平年よりも気温が低かったこともあり予測水準に回復。今後、生産の主力となる2～4歳の乳用牛頭数が前年度水準に回復することや、本年度産サイレージ等の給与開始による増産が期待されることから下期にかけて前年を超える見込みであるものの、通期では前年をやや下回る見通しである。

都府県では、7月は猛暑により予測水準となった。8月に入り、東日本では連続した降雨等により落ち込みが少なかった一方で、西日本では厳しい暑さが続いたことや今春の分娩頭数が前年を下回ったことにより予測よりも落ち込んだ。東日本の冷涼な天候により都府県全体では予測よりもやや上回ったが、通期では前年を下回る見通しである。

こうした状況下、今後、猛暑や降雨多湿等による乳用牛への影響が、徐々に顕在化する懸念もあり、酪農生産現場では引き続き、適切な飼養管理に努め、生乳生産の減少を最小限に留める取り組みが肝要である。

2. 飲用牛乳等の安定供給への取り組み

例年9月は、学校給食も再開し、牛乳等需要が最も多い時期である一方で、都府県の生乳生産は暑熱等のため減少するこ

とから、北海道からの道外移出乳を増やすことで、都府県の飲用需要を補完しているところ。

8月下旬に発生した台風停滞に伴い太平洋航路が5日間連続して欠航した影響により、道外移出乳が一時的に不足したものの、全国の業界関係者の努力により、飲用牛乳市場の混乱を最小限に抑えることができた。

都府県の生乳生産の減少が見込まれる中、牛乳等需要が堅調であることから、生乳需給は逼迫基調で推移する見通しであることを踏まえ、今後とも、酪農乳業関係者はより緻密な情報共有に努めるとともに、業界一体となり牛乳等の安定供給に努めることが重要である。

3. 乳製品安定供給への取り組み

脱脂粉乳・バター の29年度生産量は、前年を下回って推移する見込みであるものの、酪農乳業一体となって乳製品間の弾力的な供給体制に取り組んでいることに加え、国が本年5月に決定した29年度の輸入予定数量(脱脂粉乳34.0千トン、バター13.0千トン)が、今後、順次売り渡される予定であることから、本年度の乳製品需給は安定して推移する見通しである。

こうした状況を踏まえ、国及び酪農乳業関係者は、今夏の天候要因による生乳需給への影響を注視するとともに、市場に対して適時的確な需給情報の提供に努めることが必要である。



脱脂粉乳の需給

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し C	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B +C-D	前年比
	(千トン,%)									
第1四半期	48.2	93.6	32.6	97.2	4.2	52.0	4.6	91.6	33.0	99.4
第2四半期	52.0	91.6	23.7	87.2	8.9	48.4	4.3	94.1	36.3	105.0
第3四半期	48.4	94.1	27.7	93.0	10.2	52.1	4.6	109.2	34.3	102.2
第4四半期	52.1	109.2	33.6	102.3	10.7	62.1	5.5	128.7	34.3	100.1
上期	48.2	93.6	56.4	92.7	13.1	48.4	4.3	94.1	69.3	102.2
下期	48.4	94.1	61.4	97.9	20.9	62.1	5.5	128.7	68.6	101.1
年度計	48.2	93.6	117.7	95.3	34.0	62.1	5.5	128.7	137.9	101.7

バターの需給

	期首在庫量		生産量		輸入 売渡し C	期末在庫量			推定出回り量	
	A	前年比	B	前年比		D	月数	前年比	A+B +C-D	前年比
	(千トン,%)									
第1四半期	24.5	111.0	16.8	91.4	1.6	27.3	4.5	104.5	15.5	90.9
第2四半期	27.3	104.5	12.2	84.7	2.8	26.0	4.3	97.6	16.3	96.2
第3四半期	26.0	97.6	12.9	92.9	5.8	20.8	3.4	87.0	23.9	110.7
第4四半期	20.8	87.0	17.4	102.3	7.9	28.6	4.7	116.7	17.5	100.6
上期	24.5	111.0	28.9	88.5	4.3	26.0	4.3	97.6	31.8	93.5
下期	26.0	97.6	30.3	98.1	13.7	28.6	4.7	116.7	41.3	106.2
年度計	24.5	111.0	59.2	93.1	18.0	28.6	4.7	116.7	73.1	100.3

※29年度の輸入売渡しは、28年度分の追加輸入残量と29年度の輸入予定数量の合算。



動画でわかりやすく学べる「牛の扱い方マニュアル」

米国FARM (Farm Assuring Responsible Management) プログラム

ベテランの酪農家であれば牛との接し方・扱い方の勘所を自然と身につけていますが、新たに酪農を始める人たちにとっては、いかに早く牛の習性を知り、扱いに慣れ、牛が持っている生産能力をフルに発揮できるかが酪農にとって大切なポイントとなるのではないのでしょうか。

特に、繋ぎ(個体毎)飼いからフリーストール／フリーバーンといった多頭群飼いへの移行に伴い、搾乳場所が繋ぎ牛舎内からミルクキング・パーラーへ変わり、さらに最近は搾乳ロボットの登場で酪農の形態や手法が変化しています。多様化とともに自動化も進む中、牛と直接触れ合う必要性や機会も以前に比べ減ってきており、牛との距離も変わってきているように思います。

そのような中、少なくとも牛群替えや種付け、削蹄、疾病・怪我の治療等の際に、いかに牛にストレスや負担をかけずに効率良く牛を誘導・移動させ、対処するかが大切になるでしょう。

また、家族経営酪農に加え企業型酪農経営において、雇

用従業員に牧場運営を任せるケースが増えている中で、上手な牛の扱い方を習得してもらうことは牧場経営そのものに大きく影響してきます。

そこで今回は、海外例として米国“FARM Program”の中で「牛が本来持っている性質・特徴を動物生態学・行動習性をもとに作成された牛の扱い方マニュアル」をご紹介します。



JミルクHP掲載の動画(英語/スペイン語対応のみ)をご参照ください。

FARM Program (米国酪農家責任保証管理プログラム)とは DMI (Dairy management Inc.) の支援を受けて、米国生乳生産者連合である National Milk Producers Federation (NMPF) によって米国すべての酪農家が責任をもって保証すべき基準を設定することで、酪農乳業の継続的な向上を図るべく 2009 年に制定された。FARM プログラムは、米国の酪農家、協同組合、および乳処理業者(乳業者)により構成実施されています。実際の取り組みテーマとしては、①環境保全、②家畜管理、③抗生剤の取り扱い、の3つ。



IFCN Dairy Conference 2017最新レポート

竹下広宣氏 名古屋大学大学院 生命農学研究科 准教授

IFCN Dairy Conference レポート第二弾として、今回はニュージーランド(NZ)女性研究者の報告をお伝える。彼女の研究課題は「経営環境の良い年にリスクを怖れず率先して経営拡大に走るタイプの酪農経営者は、悪い年に被るリスクに対してもっとも備えを講じているか?」というものであった。言い換えると、「攻めに強い酪農家は、守りも強い! 逆境に耐える経営者なの?」といったところであろうか。



さて、彼女がこの課題をきっかけ、NZ酪農経営者を対象に行った調査データから導き出したその答えは「No!」。つまり、もっと

も攻撃型の酪農家をもっとも守備に優れている訳ではないというのだ。そう結論付けた理由は、「負債を低くおさえる」、「限界まで生産しない」といったリスクマネジメント戦略が不十分であったからだそうだ。そして、この調査結果を踏まえ、“逆境に強い酪農家(Resilient Farmer)”の要件として、彼女が示したのは次の五つであった。Strategic thinking(戦略的思考)、Willingness to change(変革意欲)、Self-efficacy(自己効力感)、Social sensemaking(酪農の社会的意味付け)、Locus of control(統制の所在)。お気づきのとおり、改善すべき具体的経営活動は一つも含まれていない。すべて経営活動の源となる経営マインドである。このような意識改革の必要性があるかはわからないが、もし日本でも意識改革が進めば攻守揃った酪農経営者が今以上に増えるのかもしれない。



3組織の交流と相互連携を目的に合同開催

平成29年度「乳の学術連合」研究報告会

乳の学術連合は、8月26日都内において、学術領域を超えた研究交流を目的に、3つの研究組織（牛乳乳製品健康科学会議・乳の社会文化ネットワーク・牛乳食育研究会）の学術研究報告会を昨年引き続き合同で開催した。

領域横断的な共同研究の足掛かりに

開会にあたり、主催者を代表してあいさつした乳の学術連合運営委員会委員長の折茂肇氏は、「従来は3つの研究会ごとに研究報告会を開催してきたが、研究分野での相互連携を図ることを目的に昨年より乳の学術連合として合同で開催することにした。昨年は、2日間にわたり実施したが、多くの研究者の方から他の学術分野の研究成果や内容をもっと勉強したい、可能であれば共同研究なども模索したいとの要望から、今年は1日で3分野の研究報告を行うこととした。各研究発表の時間は短くなるが、他分野の研究者にも報告を聞いていただくことでそれぞれの研究における社会的有用性を異なった視点で検証するとともに、新しい研究の方向性やアイデアを提供しあうことができるのではないかと考えている。また、乳の学術連合ならではの領域横断的な共同研究の足掛かりが生まれることを期待している」と述べた。

平成28年度に実施した27件の公募研究と2件の指定研究の報告が行われ、審査により優れた研究が表彰された。

「乳の社会文化」

- 最優秀賞** 治療食における牛乳利用の栄養学的評価と対象者の嗜好・摂取意欲の変化
杉山 寿美（県立広島大学 人間文化学部 教授）
発表者：野村希代子（広島女学院大学 人間生活学部 専任講師）
- 優秀賞** TPP「大筋合意」内容にもとづく関税障壁の変化が日本の酪農乳業に及ぼす影響に関する研究
清水池 義治（北海道大学大学院 農学研究院 講師）
- 優秀賞** 牛乳販売店としての婦選獲得同盟
尾崎 智子（同志社大学 人文科学研究所 社外・嘱託研究員）

「牛乳乳製品健康科学」

- 優秀賞** 牛乳に特徴的且つ多量に含まれる脂肪酸による2型糖尿病リスク低減
坂根 郁夫（千葉大学大学院 理学研究院 教授）
- 優秀賞** 日常的な牛乳摂取と身体活動は、筋量の増加と筋機能の向上に役立つか～大規模無作為標本コホート研究～
立木 隆広（近畿大学医学部 助教）
- 奨励賞** プロバイオティクスの認知機能とストレスへの影響に関する研究
高垣 堅太郎（ライブニッツ脳科学研究所 グループリーダー）

「食と教育」

- 最優秀賞** 偏食傾向の強い自閉症児に対する牛乳・乳製品摂取の段階的食指導
水野 智美（筑波大学 医学医療系 准教授）
- 優秀賞** 震災後の子どもたちの牛乳・乳製品摂取から探る効果的な食育のあり方に関する研究
佐藤 ゆき（東北大学大学院 医学系研究科 助教）
- 優秀賞** 「朝牛乳摂取の健康増進効果」の教育的普及についての応用研究～各年齢層に応じた教材リーフレット作成とその効果の検証～
原田 哲夫（高知大学 教育研究部 教授）

総評

「乳の社会文化」部門

生源寺眞一氏（乳の社会文化ネットワーク代表幹事）

「今回は、事前に論文そのものを読んでおり、評価の高い研究が多くみられた。最優秀賞に選ばれた杉山先生の研究は、治療食献立への牛乳の利用実態などについての研究で、管理栄養士や栄養士が、治療食における牛乳提供の意義を理論的に把握し、食事指導等に反映させることで病状改善に対して貢献できる、という点を評価した。乳の社会文化では、経済、歴史、栄養など多様なテーマの研究が行われたが、今後も引き続き他分野の方でもわかるように工夫をしていただきたい」と述べた。

「牛乳乳製品健康科学」部門

中村丁次氏（牛乳乳製品健康科学会議副代表幹事）

「最優秀賞の研究はなかったが、とてもエキサイティングな発表があった。優秀賞の2点、まず坂根先生は、牛乳の脂質（ミリスチン酸）に糖尿病予防効果があるのではというもの。糖尿病予防で脂質に注目されたのはおそらく初めてだと思う。従来、脂質はリスク要因として見られていたが、もしかしたら機能性があるのではという非常に可能性を秘めた発表だったと思う。また立木先生は、牛乳乳製品は高齢者の運動機能向上に影響しているのではというもの。元気な高齢者は牛乳を飲んでいるのではという仮説は従来からあったが、なかなか検証されていなかった。これを大規模なコホート研究を活用して検証された」と述べた。

「食と教育」部門

角屋重樹氏（牛乳食育研究会代表幹事）

「今回の発表への評価は、研究目的と結果が一致していることや、誰でもわかるように丁寧で、詳細な記述をしていることで再現性を感じられるか、などの視点から最優秀賞には、水野先生の研究を選んだ」と講評した。

また、「近年、大学の研究審査委員会が厳しくなっていることもあり、学校を調査する場合、保護者にも配慮が必要で、必ず学校長の承認を得てから調査をしてほしい」と述べた。

牛乳・ヨーグルトには高血圧や糖尿病の予防効果

岡山 明 氏 生活習慣病予防研究センター代表 / 第47回メディアミルクセミナー

Jミルクは、「乳脂肪をめぐる健康に関わるエビデンス：最近の動向～牛乳乳製品摂取習慣と生活習慣病発症リスクとの関連性～」をテーマに、メディアミルクセミナーを9月21日都内で開催した。

講演で岡山氏は「『飽和脂肪酸を多く含む牛乳の過剰摂取は動脈硬化を促進するのではないか』という考え方（仮説）があるが、ここ1～2年の研究で、世界的に牛乳乳製品の摂取習慣と生活習慣病発症との関連性の解析が進んだ。



岡山 明 氏
生活習慣病予防
研究センター代表

結果、LDL（悪玉コレステロール）を上昇させるが、同時にHDL（善玉コレステロール）も上昇させることがわかった。これは『牛乳の過剰摂取は動脈硬化などの虚血性心疾患を促進させるとは言い切れない』ということ。また、牛乳・ヨーグルトは高血圧や糖尿病の予防効果があることもわかってきた。

この他、塩分摂取減少のため、カリウムの摂取を見直す動きが出てきている。牛乳はカリウムの供給源としても優れた食品なので、摂取を増やすことで、高血圧や脳卒中、介護などの予防効果が期待できる」と述べた。

連載

乳脂肪にまつわる最近の話題 その2～飽和脂肪酸（続き）～

海外エビデンス情報

前回、乳脂肪中には悪玉コレステロール(LDL-C)の血中濃度を上げる作用を持つ飽和脂肪酸が多く含まれており、これを理由に現在多くの国で心血管系の健康のために、脂肪分を取り除いた低脂肪牛乳の摂取を推奨する食事摂取ガイドラインが設けられているというお話をしました。日本の食事摂取基準では、飽和脂肪酸の1日摂取量の上限値は示されていますが、欧米に比べて牛乳の摂取量がそれほど多くないこともあってか、低脂肪牛乳の摂取を推奨する文言まではありません。ただ、上記のようなことを背景に、牛乳に飽和脂肪酸が多く含まれることを不安視する声がときどき寄せられます。

牛乳摂取と心血管病発症リスクの増加については、ガイドラインは仮説に基づいてのものであり、証明されているというわけではありません。牛乳にはほかにもいろいろな栄養素が含まれており、そうしたものの相互作用も考えられ、これをはっきりさせるためには長期間にわたる疫学研究(前向きコホート研究や、無作為化比較対照試験(RCT)と呼ばれる臨床試験など)の結果をみないとわかりません。

ところが、ここ2、3年のうちにこのあたりのことを追求した疫学研究が多数報告されるようになってきました。それも単一の疫学研究ではなく、複数の類似疫学研究を予め定められたプロトコルに従って統合的に解析する、システムティックレビューとよばれる手法によるものが多く公開されるようになってきたのです。この方法に従ったものは精度が高まるほか、バイアス(何ら

かの偏りがあって真実からはずれた結論に至ること)も排除されやすくなり、いろいろある評価方法の中では信頼性が最も高いとされています。

結果ですが、飽和脂肪酸の摂取と心血管病の発症リスクとの関連性は確かにありそう、しかし牛乳摂取習慣と病気の発症リスクを見た場合には、中立的かあるいはむしろ予防側に働く、というものが多くを占めているのです。ある論文では、「飽和脂肪酸が心血管代謝的な健康に対して与えると言われている悪影響は、牛乳やチーズなど、複雑な食品のマトリクスの一部として摂取される場合には認められなくなる」と表現されています。この辺りが确实視されるためにはもう少しエビデンスの蓄積が必要かもしれません。

これらの結果は概して欧米諸国におけるものであるということで、日本人の場合、もともと欧米人に比べて食事全体の中に占める牛乳乳製品の摂取量の割合が少ないこともあって、牛乳乳製品の摂取習慣と生活習慣病発症との関連性を追いかけた疫学研究の数自体が少なく、まだシステムティックレビューまでを実施できる状況に至っていない、という面があります。ですので、上記のようなことが日本人にも当てはまるかどうかについてはまだ研究の蓄積が必要です。しかし欧米では、上記研究結果を受けて、低脂肪牛乳を推奨する食事摂取ガイドラインを見直すべきとの動きがでてきています。今後の動向を注視していく必要があるでしょう。なお、このページの上段で紹介している第47回メディアミルクセミナーではこの話題が取り上げられました。(つづく)

業界が思いをひとつに。酪農の特性を活かしては？

菊池 一郎 氏 関東生乳販売農業協同組合連合会 代表理事会長、酪農とちぎ農業協同組合 代表理事理事長

日本の農業の特性や役割を踏まえた改革議論が必要

— 酪農の生産基盤強化、流通制度や酪農組織のあり方などについて、近年さまざまな改革案が提示されています。菊池会長はこうした動きをどのように感じられていますか。

菊池氏：多くの産業や企業が目覚ましいスピードで変化しているなか、農業組織体は変化が遅いと言われます。遅いから悪いのではなく、そこには農業組織体の特性が関係していると思います。たとえば、資本の回転が遅い点があります。今日生まれた牛が搾乳できるようになり、投下した資金を回収できるようになるまでに5年くらいかかる。いま実行したことが、結果として出てくるのは5年、10年先。そうした産業特性の上に組織があるからです。

酪農を含めた組織改革は必要と私も思っています。しかし、ある程度の長いスパンで考えることが重要です。たとえば現行の農協制度を崩すと、小さな農家ほど経営が苦しくなって離農が進み、元に戻すことはできません。本来、協同組合とは、規模の大小に関わらず皆が仲間として支え合うための組織です。規制改革会議の提言は、むしろ組織内での競争を促すものですが、協同組合の理念からすると、それは違うのではと思います。

農協は地域の担い手となる小さな農家も支援していますし、高齢者家庭へのホームヘルパーの派遣や買い物支援などを、農協が参画する組織で担っている事例もあります。豊かな自然環境のなかで人々が暮らす農村、いわば「田舎」は、日本人の心の原風景であり、癒しを与えてくれるものです。そうした「田舎」を維持する農業や農業組織の役割まで踏まえたうえで、これからの農業施策や食の自給率向上策を考えることが重要だと思います。

もうひとつ大切なのは、方向性の統一です。酪肉近代化や農業基本法といった方針がある一方で、それとは別の方針を官邸主導の規制改革会議が提示する。これでは私たちとしても、どちらに軸足を置くべきかという判断が難しくなってしまいます。

牧場や農村の“癒しの力”を社会貢献につなげる

— 今後、業界全体で取り組むべき課題、あるいはできる



菊池 一郎 氏

関東生乳販売農業協同組合連合会
代表理事会長
酪農とちぎ農業協同組合
代表理事理事長

ことは何か、ご自身のお考えをお聞かせください。

菊池氏：研究によって見出されたエビデンスを発信する方法を工夫することが重要です。牛乳乳製品の価値のひとつとして、牧場から食卓までの情報を伝えないと、一般消費者には届きにくいと思います。女性誌での発信や話題のジビエ料理とのコラボなど新たな切り口も試しながら、「子どもの健康」や「健康長寿」といった“分かりやすい言葉”で伝えていくことが大切です。

牛乳乳製品や酪農の価値のひとつとして、酪農乳業による社会貢献も重要だと思います。健康増進への貢献はもちろんですが、前述した農村を支えることによる精神的な豊かさへの貢献もあります。私の牧場では以前から、牛と一緒に働きたいという思いがある人たちを受け入れて、酪農の仕事を手伝っていただいています。自然が好きな人や都市生活に疲れた人も含め、多くの人々の心を癒す場として、牧場や「田舎」には大きな力があると感じています。

業界が一体となり、思いをひとつにして社会貢献に取り組むこと。それこそが、酪農乳業への理解や牛乳乳製品の価値向上につながる、大切な活動の下地にもなるのではないのでしょうか。

JミルクHP



取材後記

今回は菊池会長ゆかりの地・栃木県で取材。ご自宅の牧場へも訪問しながら様々なお話を拝聴しました。指定団体長として業界団体への貴重なご意見を伺うとともに、国内の酪農業が持つ「安定的な食糧供給」の役割が国際化の進展とともに一層重要度が増す一方で、「社会貢献」という側面からの思いも伺いました。幅広い視点での考察と実践を勉強させていただき、菊池会長の御人柄と情熱にも触れ、心温まり熱くもなる一日となりました。菊池会長をはじめ、お世話になりました酪農とちぎ農業協同組合の皆様にも改めて感謝申し上げます。

社員食堂から“乳業メーカーらしさ”を発信

森永乳業社食で6月から乳和食提供

New-^{乳和食}
Washoku

森永乳業株式会社では、2017年6月から週1～2日・1～2品の頻度で、本社社員食堂のメニューに乳和食を取り入れている。

本社ビルに入居する他社社員も利用することができ、1日平均で750人ほどが社食で食事をとっている。



上は本社社員食堂の様子。右メニューは豚肉と揚げごぼうのサラダ仕立て、ミルクキンピラ、ミルク豚汁が提供されたもの。



同社員食堂では、数年前に乳和食を試験的に数回提供したことはあるが、継続的な採用は今回が初めて。同社員食堂の管理栄養士は、「牛乳に苦手意識のある人でも乳和食を楽しみにしてもらえるようにしたい」と語る。

同ビル内の他社の社員も食堂を利用しているため、なかには和食に牛乳を使うことに抵抗のある人もいるかもしれない。

しかし、減塩など乳和食の持つ健康面の効果は、本来長い目で評価することが大切であることから、乳業メーカーが、“和食+牛乳”を普段から親しめるような環境をつくることで、和食に牛乳を使うことに対する違和感も薄まっていくことが期待される。



おいしく減塩！乳和食レシピ

ミルクの**コク**を煮物に活かす

筑前煮

レシピ：小山浩子氏
(料理家・管理栄養士)

干ししいたけを「牛乳だしで戻す」のがポイント。旨みの相乗効果でしっかりとした味に仕上がります。根菜との食べ合わせで、牛乳にはあまり含まれていないビタミンCと食物繊維が補えるのも嬉しいですね。風邪の予防にもおすすめです。

作り方

- 1 Aを合わせ、干しいたけを手で割り入れて戻しておく。
 - 2 鶏肉はペーパータオルで水分をふき、酒をもみ込んでおく。
 - 3 フライパンにBを入れて加熱し、Cを加えて表面を焼く。
 - 4 にんじん、たけのこを入れて炒め、2を加えてサッと火を通したら1を戻し汁ごと入れ、クッキングシートで落とし蓋をして強火にする。
 - 5 ツツツとしてきたら中火にし、時々底から混ぜながら15～20分煮含める。
- 仕上げにいんげんを加えて、火を通す。

乳和食サイトをcheck!



1人分

エネルギー
222kcal

カルシウム
131mg

塩分
1.0g

材料(4人分)

A 牛乳 …… 300ml
めんつゆ …… 大さじ2
(3倍濃縮)

B 赤とうがらし…1本(種を除く)
ごま油 …… 小さじ1
C れんこん(輪切り)…100g
ごぼう(斜め切り)…1/2本
こんにゃく(手綱)…1/2枚

干しいたけ…4枚
鶏もも肉(2cm角)…150g
料理酒…小さじ2

にんじん(乱切り)…1/2本
茹でたけのこ(半月切り)…1/4本
さやいんげん(斜め切り)…4本

厚生労働省の「食生活改善普及運動」に牛乳の摂取が追加

「毎日の暮らしにwithミルク」啓発ツールについて

厚生労働省は、毎年9月を「食生活改善普及運動月間」と位置づけ、全国的な展開を推進している。

昨年度までは、「毎日プラス1皿の野菜」、「おいしく減塩1日マイナス2g」を柱に推進されたが、今年度から20～30代のカルシウム・たんぱく質・カリウム摂取が、60歳以上と比較して不足がちであることから、「毎日の暮らしにwithミルク」という牛乳の摂取を習慣化させるための項目

が追加された。

小売店や飲食店等での活用を促進するため、店頭のわかりやすい場所に掲示できるPOPと、商品に貼って使えるシールを同省が作成し、「スマート・ライフ・プロジェクト」の公式サイトからダウンロードによる活用が促された。

現在、同省では9月の実施状況を調査しており、優良事例については公表する予定である。

基本テーマ

食事をおいしく、バランスよく



基本テーマに加えて

毎日プラス1皿の野菜
おいしく減塩1日マイナス2g
毎日の暮らしにwithミルク

活用ツール



商品用マークシール



店頭用POP

今後のイベント開催の情報

※会場やプログラム詳細はJミルクHPをご参照ください

平成29年度酪農乳業みらいセミナー

- 11月22日(水) 13時30分～16時30分 ※13:00受付開始
開催場所: ベルサール東京日本橋(東京)
- 12月6日(水) 13時30分～16時30分 ※13:00受付開始
開催場所: ACU-Y Y0313 大研修室(札幌)
- 12月20日(水) 13時30分～16時30分 ※13:00受付開始
開催場所: JR博多シティ会議室(福岡)
- 1月31日(水) 13時30分～16時30分 ※13:00受付開始
開催場所: 神戸国際会館(神戸)

各ライフステージにおける牛乳乳製品摂取の意義と、明治から現代の酪農乳業の成果に至る歴史をわかりやすく学ぶ！
講演1「牛乳乳製品を活用して健康長寿社会を達成しよう」
公益財団法人骨粗鬆症財団 理事長 折茂肇氏
講演2「日本の酪農乳業のフロントランナーたち」
西日本食文化研究会 主宰 和仁皓明氏

学生のための乳の研究活動成果報告会

- 12月26日(火) 10時～17時30分 ※時間は予定
開催場所: TKPガーデンシティPREMIUM京橋(東京)

栄養学・教育学・マーケティング等に係る大学の研究室・ゼミ・学生研究団体等に所属する大学生(大学院生含む)が行った「乳」に関連する12の研究室・ゼミから調査研究活動の成果報告会を開催。

平成29年度酪農乳業の国際比較研究会

- 12月11日(月)
研究会: 13時30分～17時20分 ※13:00受付開始
情報交換会: 17時30分～
開催場所: ベルサール東京日本橋(東京)

IFCNの最新調査と分析結果、並びに現在実施している日本型酪農経営研究会による調査研究の報告に基づき、「我が国における持続可能な酪農生産の課題(仮題)」をテーマに討論。
報告者: 名古屋大学大学院農学生命研究科准教授竹下広宣氏、(一社)Jミルク専務理事 前田浩史

パネルディスカッション: モデレーター / 福島大学農学系教育研究組織設置準備室教授 生源寺眞一氏、パネリスト / 上記報告者、ロマンチックデーリィファーム代表 須藤泰人氏、フジタファーム代表 藤田毅氏

畑中三応子氏講演

- 11月29日(水) 14時～16時 ※13:30受付開始
開催場所: 東京

Jミルクが連携する「乳の学術連合」では、今後の乳文化研究の視点を確立するための勉強会を開催している。今回は、ライター畑中三応子氏に、近代以降の牛乳乳製品を中心に食にまつわる言説、流行などについて講演いただく。

Meeting & Event

7月 July

18 第2回需給委員会

- 平成29年度生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題について

26 第1回ポジティブリスト委員会

- 平成29年度ポジティブリスト制度に対応した定期的検査の実施について
- 平成29年度アフラトキシンM1検査の実施について
- 平成30年度以降の定期的検査における管理対象物質の選定について
- 平成29年度ポジティブリスト委員会での検討課題について

8月 August

31 第2回マーケティング委員会

- 第3期3か年計画策定に向けて
- 平成29年 World Milk Day 6.1牛乳の日、牛乳月間の取り組み結果について

9月 September

15 第1回マーケティング専門部会

- 第3期3か年計画策定に向けて
- 平成29年 World Milk Day 6.1牛乳の日・牛乳月間の取り組み結果について

19 第3回需給委員会

- 平成29年度生乳及び牛乳乳製品の需給見通しと当面の課題について

20 第1回生産流通専門部会

- 次期3か年(平成30～32年度)計画策定に向けた取り組みについて
- 「酪農乳業産業基盤強化特別対策事業」の実施状況と今後の推進について
- 異味異臭問題への対応について

27 第3回理事会

- 平成29年度臨時総会の招集及び付議する事項について
- 次期3か年(平成30～32年度)計画の策定について
- 酪農乳業産業基盤強化特別対策事業の実施状況と今後の推進について

Schedule

11. 14	マーケティング委員会	12. 20	酪農乳業みらいセミナー(福岡)
11. 16-17	牛乳食育研修会(福岡)	12. 未	第4回需給委員会
11. 22	酪農乳業みらいセミナー(東京)	1. 9	乳業団体新年賀詞交換会
11. 25	ヒーロー&ヒロインコンクール表彰式	1. 13	栄養指導実践セミナー(和歌山)
11. 25	栄養指導実践セミナー(神戸)	1. 17	乳の学術連合運営委員会
11. 29	乳の日本食文化融合に関する勉強会(第6回)	1. 19	第4回理事会
11. 30	生乳検査精度管理認証制度研修会 (第16回更新施設信頼性確保部門対象)	1. 23	健康科学免疫調節分科会
12. 6	酪農乳業みらいセミナー(札幌)	1. 25	健康科学運動スポーツ分科会
12. 11	酪農乳業国際比較研究会(IFCN 報告会)	1. 31	酪農乳業みらいセミナー(神戸)
12. 19	メディア懇談会	1. 未	第5回需給委員会
		1. 未	第2回生産流通専門部会

Information

平成30年度『乳の学術連合』学術研究公募

『乳の学術連合』では、牛乳乳製品の価値向上に繋がるとともに乳を通じて社会に貢献するための多種多様な情報を広く収集・発信することを目的に、「牛乳乳製品健康科学」、「乳の社会文化」、「食と教育」の3つの研究分野で学術研究を公募している。



人と会ってお話することが好きです。ビジネスの場でも電話やメールといったコミュニケーションツールがありますが、一度でも顔と顔を合わせてお話させていただくと、文字や声だけのやりとりにも温かみを感じます。この業界に入って6年目。色々な方々に出会い、親身なお言葉に励まされ、時に背中も押していただき、今ここにいることに感謝しております。Jミルクにある貴重な情報を広く分かりやすく伝えながら、皆様の声を事業に反映させていきたいです。「思いをひとつに」と感じ合うためにも。

J-milkレポート vol.26 発行日/2017年10月 編集・発行/一般社団法人 Jミルク

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階 TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>  <https://www.facebook.com/jmilk.jp/>